０２／０２／１０　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：かたくなの罪
聖書箇所：マルコの福音書　11 章 27 節～12 章 12 節

昨年の 9 月、同時多発テロ事件実行犯をあのような行動に駆り立てたのは、一体何なのか――。
それは怒りでした。怒りというのは非常に恐ろしい力を持っています。我々は怒りを抱いてしまうと、冷静に物事を考え、判断することができなくなってしまいます。ソロモンが、「怒る者は争いを引き起こし、憤る者は多くのそむきの罪を犯す。」と言ったとおりです。新約聖書の中で、ヤコブも「怒るには遅いようにしなさい。人の怒りは、神の義を実現するものではありません。」と言っています。この「怒り」は、心の内側にふつふつとくすぶり続ける不快感、憤りです。みことばを聞くことによって、今まで自分が信じてきたものが否定されたり、自分の罪が示されたときに怒りを持っていては、決して神様の前に喜ばれる歩みができないと教えるわけです。
今朝から 2 回にわたって、イスラエルの指導者たちの犯した罪について学んでいきます。彼らはイエス様に対して 3 つの質問をしました。そのすべての質問は真実を知りたいと願ってしたものではなくて、何とかイエスを陥れようとして行ったものでした。

1．イエス様への質問
当時、エルサレムには大サンヘドリンという最も権威ある議会がありました。大体 70～71 名で構成され、ユダヤ人の政治・司法に関すること、また神殿祭儀の監督、祭司や裁判官の任職、新月とうるう年を宣言して、全世界の祝祭日を決定する権限を持っていました。祭司長、律法学者、長老たちというのは、そこの議員でした。イエス様がエルサレムに入った時、宮の中で売り買いしている人々を追い出したり、両替人の台や鳩を売る者たちの腰掛けを倒したり、大変な騒動が起こったわけです。それで彼らはイエスに対して、「あなたは何の権威があって、こういうことをしているのですか」と問い掛けたわけです。
非常に巧妙な、狡猾な質問です。イエス様がもし「神様からです」と言えば、彼らは、「神様から与えられた我々の権威と逆らうことをしていて、どうしてあなたがその権威を神から与えられたと言えるのですか、あなた矛盾していますよ」と答えることができます。そして、もしイエス様が「人から与えられた権威です。」と言うと、その「人」というのは自分たちを指さないことがわかっていますから、「勝手なことをして、あなたは大きな罪を犯した」と言ってイエス様を責めることができた。いずれにしても、この祭司長、律法学者、長老たちは、イエス・キリストが行っている行動は、自分たちの与えた権威でないゆえに、あなたが主張することは無効であり、あなたの行為は間違いであると証明しようとしていたのです。

2．イエス様からの質問
それに対して、30 節「ヨハネのバプテスマは、天から来たのか、人から出たのですか。答えなさい」と、イエス様はヨハネのバプテスマの権威について、逆にお尋ねになります。そうすると、彼らは集まって来て論じ合います。「天から」と言うと、なぜ彼に聞き従わなかったのかと責められるだろうし、「人から」と言ったら、人々が彼は神から遣わされたと信じている以上人からとは言えない。
この時、彼らが真っ先に考えたことは旧約聖書の教えです。申命記 18 章 18 節に、神様が預言者を遣わすから、人々はそれに従えとあります。ですから、もしヨハネは神からだと答えたら、従わなかった自分たちは、神に対して罪を犯したことを認めることになります。また、20 節には、神様から遣わされていない預言者が勝手なことを告げたら、その預言者は死ななければならないとあります。だからヨハネのバプテスマが人から来たと言ってしまうと、彼を殺さなければならない。しかし、この当時、多くの人々がヨハネは神様が遣わしたと信じていたわけですから、これに逆らうようなことを言ったら、自分たちの身に大変なことが起こることを知っていたのです。

あるユダヤ人の歴史家が、この出来事から約 6 年後、紀元 36 年ごろの出来事を記しています。ヘロデ大王の息子、ヘロデ・アンティパスが異母兄弟の妻を恋して、自分の妻にしたのをバプテスマのヨハネに非難され、怒って死刑にしてしまいます。そして、それまでの妻であったナバダイ人の王アレタスの娘は、父の元に逃げ、事情を聞いたアレタスは非常に怒り、軍隊を集めてヘロデの軍を打ち破り、彼を殺してしまうのです。それに関して「ユダヤ人のある人々には、ヘロデの軍隊の敗戦は神の復讐である

ように思われた。というのは、ヨハネは立派な人であり、ユダヤ人に正しい生活を送り、同胞に対する公正を、神に対する敬虔を実行し、洗礼に加わるよう教え勧めたのに、ヘロデは彼を死刑に処したからである。」と記してあります。そこから私たちはそのころ群衆がどんなことをヨハネのバプテスマに対して思っていたのか窺い知ることができます。

ですから、群衆の反発を恐れて、指導者たちは「わからない」と答えます。この言葉に彼らのずるさが出ています。

ヘブル書の著者が「もしきょう御声を聞くならば、あなたがたの心をかたくなにしてはならない」と語られた。我々がイエス様を信じていようといまいと、このみことばを通して、神様は常に我々の心に働き続けてくれます。我々の心の中に真理を教えようとします。しかし、問題なのは私たちがその真理を受け入れることができるような心の状態にあるかどうかです。かつての自分たちを振り返ってみてください。神様の話を聞いても聞いてもそれに対して心を開かなかった私たち。幾ら真理が語られても、それは私たちの心に届かないのです。もし、イエス様を信じていらっしゃらない方がいらしたら、あなたの問題はかたくなさです。神様があなたに救いの御手を差し伸べていらっしゃるのに、あなたのかたくなさゆえに神の裁きを自分の身に招くことになるのです。イエス様を信じている私たちも、神様の真理が語られている時に、心砕かれて、喜んでそれを受け入れるような態度にあるかどうかです。

さて、イエス様は心のかたくなな宗教の指導者たちに対して、旧約聖書イザヤ書の 5 章の例えを引用して真理を教えようとされます。1 節と 2 節は神様のイスラエルに対する一方的な愛を教えています。イザヤが言った「我が愛する者」とは神様のことを指します。ぶどう畑はイスラエルの人々です。やぐらや酒ぶねまでつくって、イスラエルに対して非常にすばらしい恵みを施されたことが示されています。所有者が自分の意思で、このすばらしいよく肥えた山腹にぶどう畑を作ったのです。ぶどう畑が勝手にできたのではない。所有者はこのイスラエルを選ばれて、イスラエルを愛されたのです。石の多いパレスチナの地方を耕すのにはかなりの忍耐が要ります。よいぶどうがなるためには時間がかかる。でも、神様は労力を惜しまずにイスラエルの民を愛して、甘いぶどうのなるのを期待したのです。つまり、イスラエルが神様を愛し、神様の証をすることを期待していたのです。ところが甘いぶどうにかわって酸いぶどうができた。つまり彼らは神様に逆らい続けたのです。

次の 3〜6 節に、神様の裁きが記されています。このイスラエルのために私が何かしなかったことがあるかと神様が問い掛けるのです。答えは明らかです。何もないのです。それにもかかわらず、イスラエルは神様に逆らったから、裁きがあると言っているのです。

そして 7 節では、その例えの解き明かしが記されています。

それを元にもう一回マルコの福音書を見てください。12 章で、ある人がぶどう園を造ったとあります。このぶどう園を作った人は神であることは明らかです。神様はイスラエルを選ばれ、イスラエルを特別なものとして扱われた。そして、その農地を農夫に貸すわけですが、この農夫は宗教的指導者を指しています。所有者は季節になって、収穫の分け前を取るために、しもべを農夫たちのところに遣わします。このしもべたちというのは、エリヤから始まってバプテスマのヨハネに至るまでの預言者たちです。彼らが何度も何度も神様によって神のメッセージを語るために、イスラエルの地に送られてきた。ところが、イスラエルの民は彼らを辱め、彼らを決して敬うことがなかったと記されています。（2〜5 節）

そして 6 節、愛する息子の話が出てきます。これはイエス・キリストのことを指していることは明らかです。神は、このイエスだったら、みんなが敬うであろうと思って、イエス・キリストを送ります。ところがイスラエルはこれを殺そうとするのです。

そんなことが起こったらどうなるのか。この主人が戻って来て、この農夫どもを打ち滅ぼし、このぶどう園をほかの人たちに与えてしまうわけです。つまり神様はイスラエルが余りにもかたくなだったゆえに、今度は異邦人に豊かな祝福を与えようとされた。神様に仕え、その栄光を世の人々に証しするはずのイスラエルがいつの間にか神様に逆らい、神のみこころに全く反することを行う者になり、神の御子イエス・キリストをも殺そうとした。いつの間にか農夫が主人に逆らってしまった。イエス様は、その問題点を指摘されたのです。

そして、10、11 節のところで、イエス様は旧約聖書のみことばを引用されています。（詩篇 118 篇 22、23）なぜかというと、イエス様がエルサレムに入城したときに、群衆は「ホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。祝福あれ。いま来た、われらの父ダビデの国に。ホサナ。いと高き所に。」と叫びます。この言葉は詩篇の 118 篇の 25 節です。つまり彼らは、ロバの子に乗ってエルサレムに入城なさる方こそ彼らが待っていた救世主なんだとよくわかっていたのです。だから、今ここでもう一度イエス様は、同じ詩篇 118 篇のみことばを引用して、彼らに気づかせようとするのです。「家を建てる者た

ちの見捨てた石」とあります。「家を建てる者たち」――これは先ほどの農夫と同じ、宗教の指導者たちです。見捨てられた石というのはイエスのことです。この見捨てるという言葉は、審判の結果、それには価値がないとして拒絶するという意味を持っています。指導者たちはイエスを調べ、。イエスを裁き、罪がないとわかっているのに彼を十字架につけたのです。このみことばが約束したとおりです。

「その石が礎の石になった」とあります。礎の石は、建物にあって最も大切な土台石です。この当時でも、家を建てる時にこの土台石を厳選しました。これがよくなかったら、家全体に影響を及ぼします。宗教の指導者たちから見捨てられたイエス・キリストが、十字架にかかり、死からよみがえって来ることによって、教会が誕生したのです。私たちの話です。この土台は、イエス・キリストです。パウロがそのことをエペソで教えるし、ペテロはペテロの手紙の中でそのことを教えます。宗教の指導者たちにはわからなかった。

こうして見てみると、聖書は物すごいでしょう。イエス様がお生まれになる遥か昔から、ちゃんとこのことが約束されていたのです。詩篇 118 篇がちゃんとこのイエスによって成就したことを言うのです。イエス様はみんながよく知っているみことばを用い、ご自分が誰であるかを人々に話し続けたのです。本当に人間の頭では考えられないような神様の技、神様の約束どおりに救世主は来られたのです。そのことを宗教の指導者たちは聞いているのですが、12 節にあるとおり、彼らはイエスが自分たちの罪を明らかにしておられることに気づいた時に、イエスに対して心を開くどころか、イエスに対して怒りを持ち、彼を殺そうとするのです。

この出来事の併行箇所がマタイの福音書 21 章に出てきます。ここでは、イエス様は 3 つの例えをお話になります。指導者たちは、自分たちは絶対に救われていると思っていました。そこでイエス様はそうではないことを明らかにするために、このようなお話しをなさったのです。ある人が 2 人の息子に、きょうぶどう園に行って働いてくれと頼みます。すると、兄は行きますと言って行かなかったのですが、弟は行きたくないと言ったのですが、悪かったと思って父の願ったとおりにしたという話です。どちらが正しいかというと父の願ったとおりにしたものだというのです。つまり、言葉だけの信仰というのは本物ではないというのです。彼らは自分たちの人前における長い祈り、自分たちの捧げものを、自分たちの奉仕を自慢しました。しかし、神様はそのような人々を見て、あなたたちは私と何の関係もないとおっしゃった。それは彼らの心が神に対してかたくなだったからです。取税人や罪人たちは自分が罪人であることを認め、救いを求めてイエスのもとに来たのです。そしてイエスも彼らを受け入れられた。

イエス様は、このユダヤの指導者たちに対して、何度も何度も悔い改めのチャンスを与えたのです。イエス様は彼らが憎くて救わなかったのではないのです。イエス様は常に彼らに救いの御手を差し伸べたけれども、彼らがかたくなさのゆえに受け入れなかったのです。彼らの一番の問題点は、彼らが恐れたのは神ではなく、人間だったことです。彼らは人の目ばかり意識していたのです。

私たちにとって必要なことはまさにこのことです。一体誰を恐れて生きているのか。もし私たちが人を恐れたら、我々も失敗することがあります。恐れなければいけないのは、私たちのすべてを見ておられる神様です。神様が何度も救いの手を差し伸べられたのに彼らはかたくなにそれを拒みつづけた。そのかたくなな心はいつまでたっても開かれなかった。きょう我々が学んできたことは、神様に対して心をかたくなにしてはならないということです。

ヘブル人の手紙の著者が言います。「きょう、もし御声を聞くならば、御怒りを引き起こした時のように、心をかたくなにしてはならない。」と。我々一人一人の心が常に神の前に砕かれて、主よ、どうぞお語りください。そしてそれを聞いた私は、あなたの助けによって、それに従って行きますという謙虚な態度、主に対するこのような態度をもって生きる。それが私たちに神様が望まれる態度です。そんな態度をもって、この 1 週間歩みましょう。そして、私たちのすばらしい主を証ししてまいりましょう。